



開拓長官時代の黒田清隆
『明治大正期の北海道(写真編)』
より転載)

働力として利用しようという思惑があったのだ。

宗谷から対雁へ

樺太アイヌが故郷を離れなければならぬ期日が迫ってきた。ロシア人が彼らの家屋を焼き払って追い出しをはかったため、十月、やむなく一〇八戸八四一人が樺太に別れを告げ、メクマ(稚内市声問村)の浜に上陸した。

彼らは宗谷から遠く離れた石狩行きを強く拒んだ。開拓使は代表を呼んで予定地の対雁(江別市)を見せ、石狩川の好漁場を与える約束もした。だが、戻って来た代表

の報告を聞いても誰一人賛成しようとはしなかった。

「アツシ判官」松本十郎も懸命に中止を訴え、しばらくは宗谷にいてもらい、時機を見て石狩に移住させてはどうか、との折衷策を提案したが、結局、アイヌ移住者の意向や松本ら開拓使札幌本庁の反対を押し切り、黒田は明治九年六月、対雁への強制移住を断行した。松本が地方視察をしている間の措置であった。

松本十郎の辞職

強制移住の報を聞き、松本はすっかり落胆してしまい、辞表を提出。北海道を去ることになった。これを知った黒田は、北海道にあわてて駆け付け、松本を引き留めようとしたが、すれ違いに終わる。

松本は「閣下はアイヌを石炭鉱の役に従事させようとしている」といった内容の手紙を残していた。なぜそう思ったのか？

「アツシ判官」の願い空しく
強行された内陸への移住は、
海の民・樺太アイヌの人々に
多くの苦しみを生んだ。



石狩川宇シビシビウス(樺太アイヌの人々に割り当てられた鮭漁場の一つ)での鮭漁業
(北海道大学附属図書館所蔵)

その因は榎本武揚にある。

当時ロシア特命全権公使だった榎本が、黒田に手紙で「樺太島より移り来る蝦夷人を開坑の工夫に用ゆる為、幌内辺に住ませ候はば至極便利」と提案したので。黒田と榎本の関係は箱館戦争以来特別なものであったから、松本はつきりこの榎本案が採用されるものと思いき、樺太アイヌの行く末を憂えたのだ。

榎本のこの余計とも言える提案が、松本を辞職に追い込んでしまった。その後、松本は故郷・鶴岡に帰り、一介の農民として生涯を送ることとなる。

アイヌ移民の悲劇

対雁に強制移住させられた樺太アイヌに対する開拓使の力の入れようには並々ならぬものがあった。膨大な国費を注ぎ、土地を提供し、農業試験場などを造って官営事業を手伝わせた。だが、樺太アイヌは海の

民。結局この計画はうまくはいかず、彼らはサケ漁やニシン漁に従事することになる。

しかし、悲劇が起こった。コレラや天然痘などの疫病の流行によって、三〇〇人以上が命を落としてしまったのだ。あとに残されたのは、樺太アイヌの恨みと国費の浪費だけであった。

強制移住から三十年後の明治三十八(一九〇五)年、日本が日露戦争に勝利し、樺太の南半分が日本領になると、三三六人が故郷・樺太に帰っていったという。

だが、さらに悲しい運命が彼らを襲う。昭和二十(一九四五)年、今度は太平洋戦争の敗戦により、樺太から再度北海道への移住を強いられ、稚内内の荒野で新たな村づくりをしなければならなかったのである。

日・口国境に生きる民族ゆえの悲劇であった。



開拓使によって札幌郡対雁村に強制移住させられた樺太アイヌの人々
(北海道大学附属図書館所蔵)